

「**田園住居**」(13番目の用途地域)が**始まるよ**。  
**新しい郊外居住のカタチを生もう!**

# 町づくりプランナー 養成塾

(塾長/ **田瀬理夫**)



造園家。1949年東京に生まれる。  
 千葉大学園芸学部造園学科卒業。  
 富士植木勤務を経て、ワークショップ・プランタゴ開設。プランタゴ代表。  
 主な仕事として、アクロス福岡、ゆりが丘ヴェルジェ、味の素スタジアム西競技場ほか。

たせ みちお

(塾長/ **田瀬理夫**)

参加者の  
 課題対象  
 となる土地

**A**

## 街なかに里山コミュニティーをプランする

街なかのL字形用地に「里山のある町角」を計画する。

趙海光(ぶらんにじゅういち)【アドバイザー】塾長・田瀬理夫

千葉県柏市の街なかの、家が建て込んだ土地。この土地に、住まい手どうしのコミュニティーを育む「里山のある町角」をプランニングします。昔の町家は、各戸は前面道路と接し、お隣の建物と接し、というものでした。しかし、今の建築基準法は、道路後退・隣地境界からの後退が強いられています。これを逆にとり、それによって生じた空き地を積極活用する方法を、趙さんは「現代町家」で方法化しました。「集まって住む」魅力を現代に活かす一つの方法です。



参加者の  
 課題対象  
 となる土地

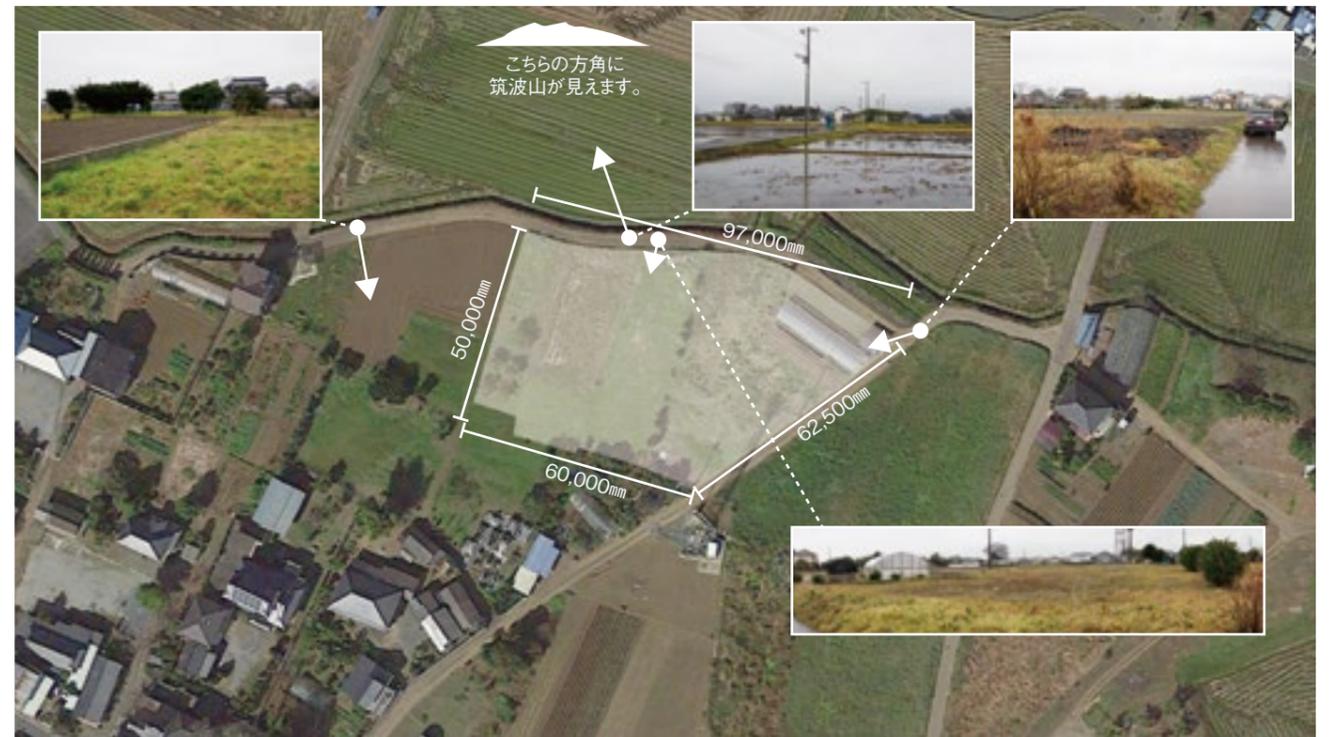
**B**

## 区域指定用地に「セルフ農家住宅」をプランする

土間のある平家×農ある生活を計画する

塾長・田瀬理夫

課題設定の対象とする土地は、つくば市により区域指定(都市計画法の規定に基づく開発行為の許可等の基準に関する条例)された区域。旧集落の中に「里山のある町角」をテーマに住宅地計画を作成し、講師の田瀬さんと一緒に検討します。田瀬さんからは、課題設計に入る前に、設計のための材料や、幾つかの手法についてお話いただきます。



4月

**9日・10日**

[Monday]

[Tuesday]

11:50集合 15:00終了

【主催】「里山のある町角」研究会  
 【協賛】一般社団法人町の工務店ネット・手の物語有限公司

【集合】つくばエクスプレス「つくば駅」\*終了後、つくば駅までお送りいたします。(セミナー会場よりバスで45分前後)

【セミナー会場】①つくば市のとある集落の古民家にて

②筑波山温泉 双神の湯「筑波山江戸屋」(寛永5年(1628年)創業)

【定員】30名(両日&宿泊参加)

【参加費】45,000円/人(税別)

(資料代・講師料(交通費含)・バス代・会場代・宿泊代(交流会費・10日朝食含)・10日昼食等)

課題設定 **A** 計画のキーワード  
**街なか**に**里山コミュニティ**を**プラン**する



プロジェクト名：「里山のある町角 in 蒲郡」

ヒントになる事例「蒲郡の計画」 住宅地計画／田瀬理夫 住宅設計／趙海光

ちょううみひこ  
**趙海光さんの本を準備しています。**

真鍋弘（編集者）／ライフフィールド研究所代表

いま、建築家の趙海光さんに「現代町家という方法——家づくりで町かどの風景を変える」という本を書いてもらっています。ここには趙さんと町の工務店ネットの小池一三さん、編集者である私の共通の思いがあります。それは次のようなことです。

これまで多くの建築家や工務店によってすぐれた住宅が日本各地に少なからずつくられてきたにもかかわらず、その界隈が魅力的な町かどに生まれ変わらないのはなぜか。それは作り手の関心が与えられた敷地のなかだけのことに終始してきたからではないか。大きな都市計画レベルで町並みはつくられても、隣近所の風景・環境については専門家も手を出さずに置き去りにしてきたからではないか。これでは町かどの風景・環境がよくなるはずがありません。

今日、住宅は個々が孤立し、周辺から閉じる方向にどんどん進んでいます。そこには住宅の高断熱高气密化の影響もあるのでしょう。しかし、私たちのめざすパッシブデザインでは、まず外部の微気候を準備することが前提です。一戸の敷地のなかで微気候をつくることを考えるよりも向こう三軒で考えるほうが、ずっとすぐれた外部環境がつけられることは言うまでもありません。ベースとゲヤによって敷地に臨機応変に対応する「現代町家」の考えは、家づくりのなかに町かどの風景・環境を修復していく方法を包含しています。これは日本の伝統的な町家の成り立ちから学んだ実践的な方法です。

いま、私たちは地域の建築家、工務店、プランナーの知恵を集めて、日本の各地に小さな魅力的な町かどを実現する種を蒔こうと考えています。一戸の敷地だけに囚われていた家づくりから町かどづくりへ視点を変える時期が来ていると切実に思います。小さな町かどをつくるためには、従来の家づくりでは必要のなかった知恵や人材が必要になってきます。このプランナー養成講座がそのための初めの一步になることを期待しています。

## 座学に先立っての報告会

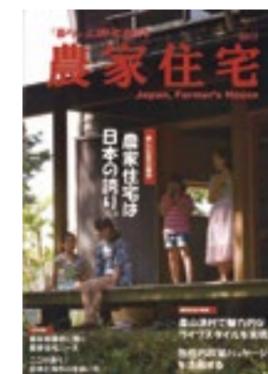
課題設定の土地を見学した後、地権者の塚本さんの自邸にて報告会を開きます。

- ①冒頭挨拶／研究会への期待……………塚本康彦  
 (つくば・桜中部地区まちづくり協議会会長)
- ②「積極郊外」をプロデュースする……小池一三  
 (里山住宅博プロデューサー・町の工務店ネット代表)

課題設定 **B** 計画のキーワード  
**区域指定用地**に「**セルフ農家住宅**」を**プラン**する



『小さな平屋に暮らす。』  
 山田きみえ 編・雨宮秀也 写真  
 (平凡社)



『農家住宅』  
 農林水産省農村振興局 発行  
 (平凡社)



『農ある暮らしで地域再生』  
 山本雅之 著  
 (学芸出版社)



『雑木林をつくる』  
 倉本 宣・内城道興 編著  
 (百水社)

### 「農家住宅」には「家庭」があった

小池一三(町の工務店ネット代表)

昔の農家は、やしきは広く、家の裏に林や竹藪がありました。庭には、ニワトリが放し飼いされていました。庭には畑もあって、きゅうり・なす・トマト・ピーマンなど、家族が食べる野菜が作られていました。暮らしの営みの庭を持つ家だから「家庭」という言葉が生まれたのではないか、と思うのです。

郊外住宅だから求められる「家庭」は、そんな生活空間を持ちたい、と思います。1区画100坪程度、土間のある平屋と、野菜畑を持った「家庭」。けれども100坪の土地は入手し難いと思われることでしょう。秘策は定借なら可能です。定借は、付加価値の高い街なかのものと考えられてきましたが、私は郊外住宅こそ定借でやるべきだと考えています。建物は借入れが必要だけど、もし月2万円の賃料で土地を借り、セルフ農業できる「新農家住宅」が建てられたらいいと思いませんか。それはどんな土地計画になるのか、プランしましょうではありませんか。